凡生氏

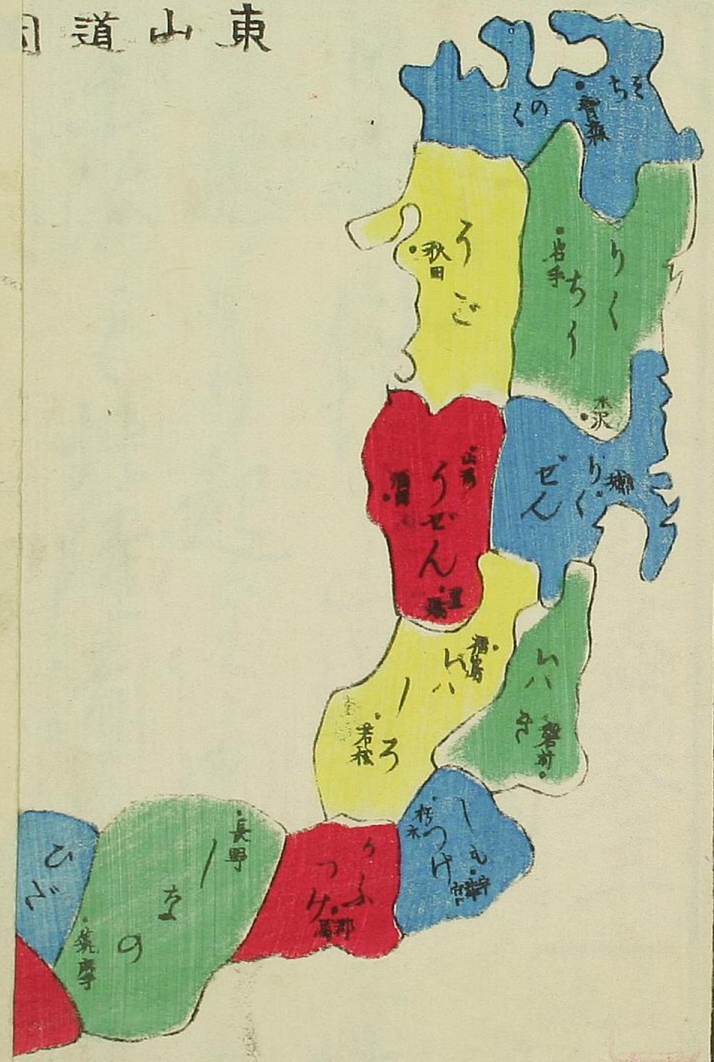
日本國盡

東山道

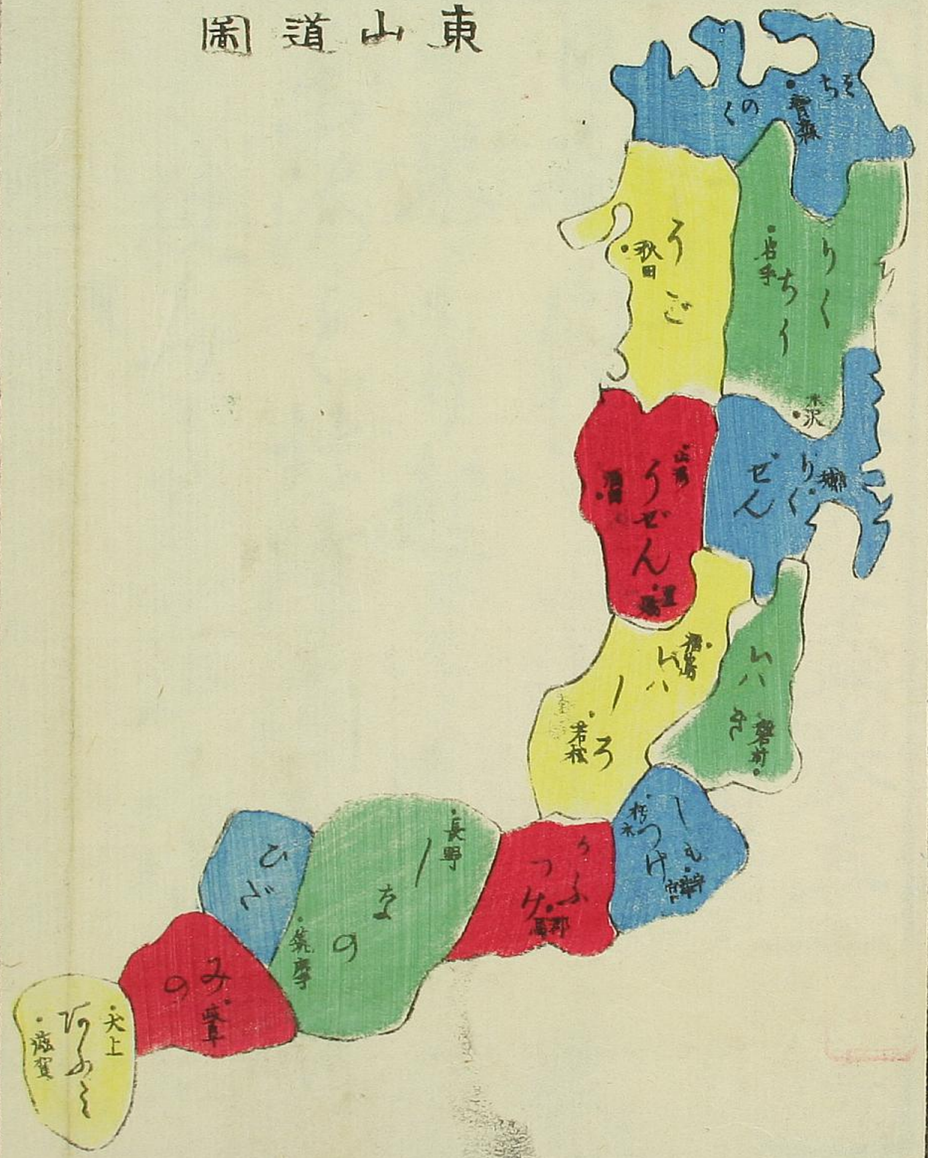
三

柳田文庫
文庫11
A1846
3

東山道国


ちくぜん
筑前
ちくご
筑後
ぶんご
豊後
ひご
肥後
ひゅうが
日向
さつま
薩摩
おおすみ
大隅
つしま
対馬
いき
壱岐
ながと
長門
すおう
周防
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
つしま
対馬
いき
壱岐
ひぜん
肥前
ちくご
筑後
ぶんご
豊後
ちくぜん
筑前
ながと
長門
すおう
周防
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
ちくご
筑後
ぶんご
豊後
ちくぜん
筑前
ながと
長門
すおう
周防
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
ぶんご
豊後
ちくぜん
筑前
ながと
長門
すおう
周防
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
ちくぜん
筑前
ながと
長門
すおう
周防
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
ながと
長門
すおう
周防
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
すおう
周防
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
いわみ
石見
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
しまね
隠岐
おき
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
おき
隠岐
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
はくさい
伯耆
いなば
因幡
たじま
但馬
いなば
因幡
たじま
但馬
たじま
但馬

東山道圖



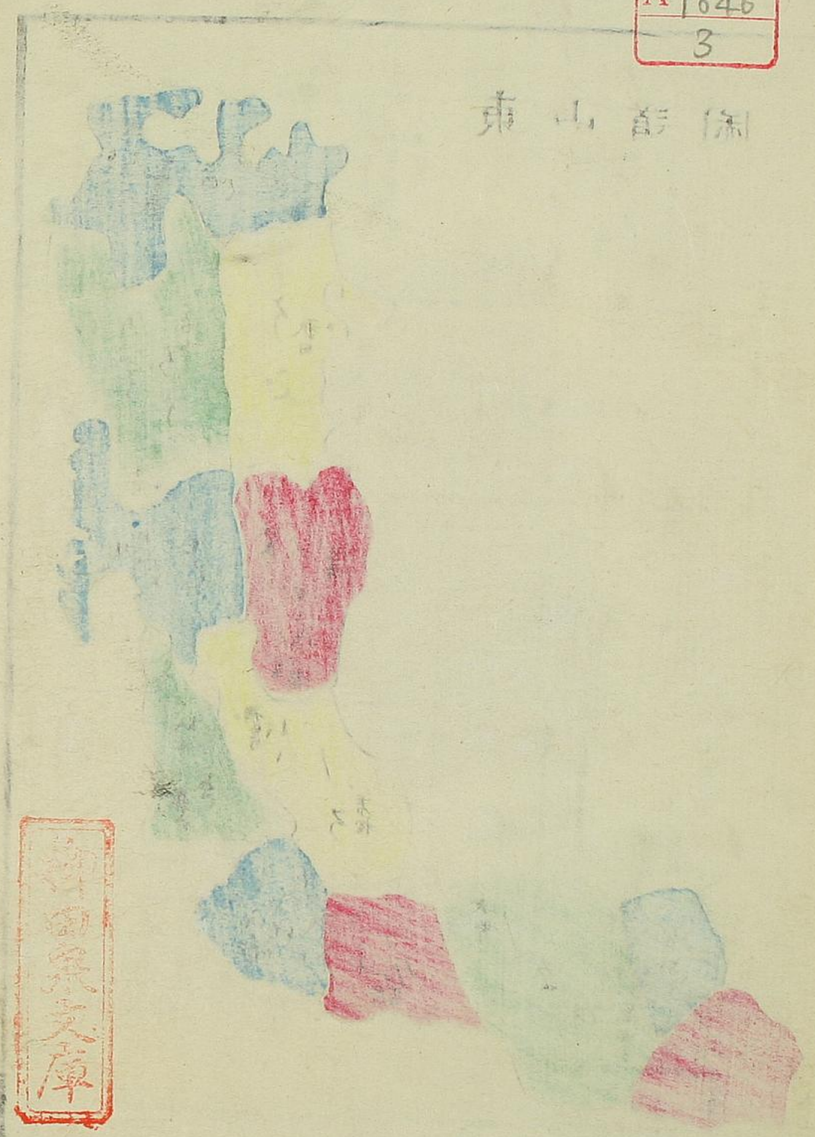
文庫11
A1846
3

八生民日本國盡卷三

東山道六十三國

白井藏書

日本国地の山道にして五畿の東より起て南と小さ東海と北陸道の二道ふく接みしる中を。



48 9659

険阻の山脈[illegible]き連り絶
の脊中ふさぐ仰ぎ其
尾を未だ三方とも沿風
蒼き海を吏げ小
向く長く延び小海乃と
一水を迫門を隔てゝ望む。

先づ第一に近江を海
し國の北に北西面の
三方を越前を狭を沢を
丹波山城伊賀伊勢の
六國を色[illegible]東を
美濃を信濃四方山

宮中より琵琶の形琵琶
琶の湖南へ狹く北廣く
横巾七里北は賢の越よ
り東へ二十四里四方北
へ山川の水みないろ
なる瑠璃一碧の

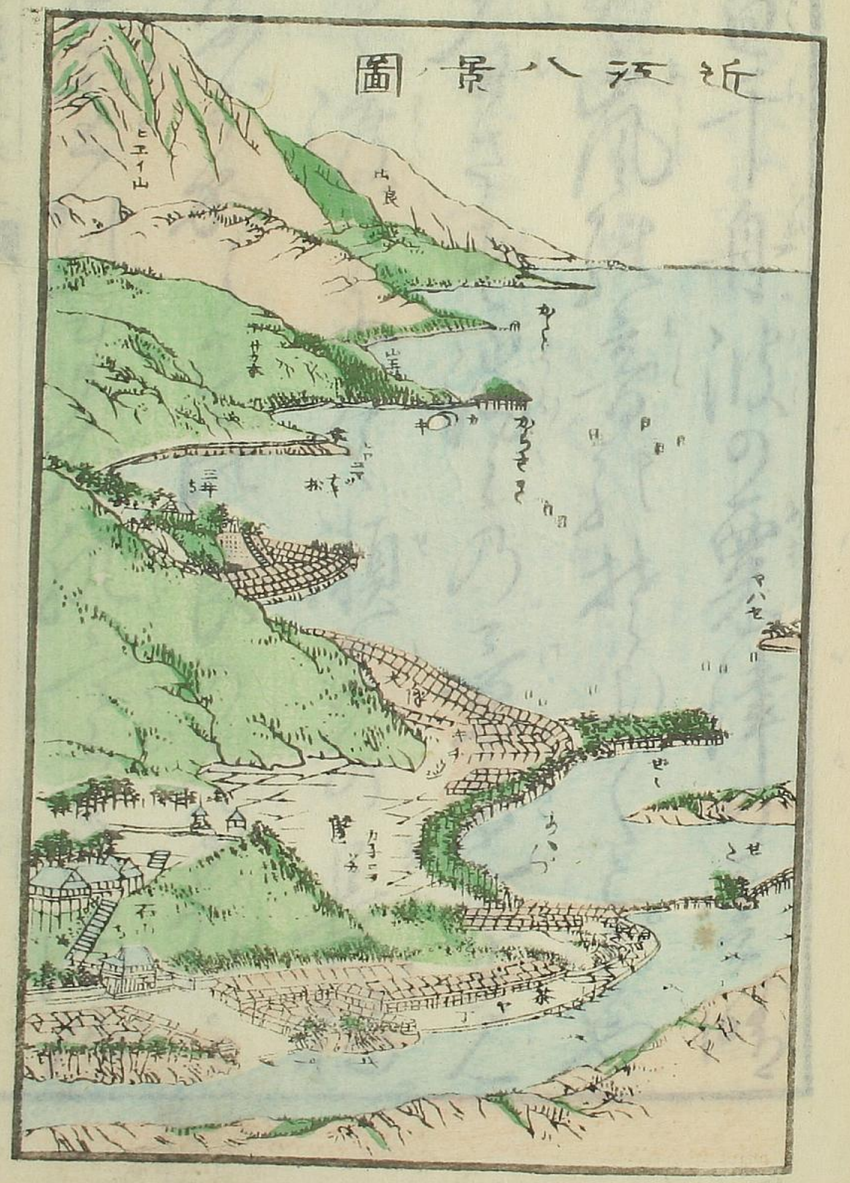
水の面見て日本第一の
海内奇觀支那の西湖も
いづれ劣らぬ名所なり
ためしに北湖水いを
もし富士の湧出
しとき同じく出来し

その東北は狹き南北は廣く
して延びて流れて又
東へ山城へ入て宇治川
の流となりて海へ入る
湖中の西の方に竹
生嶋とて是も亦景
ノ

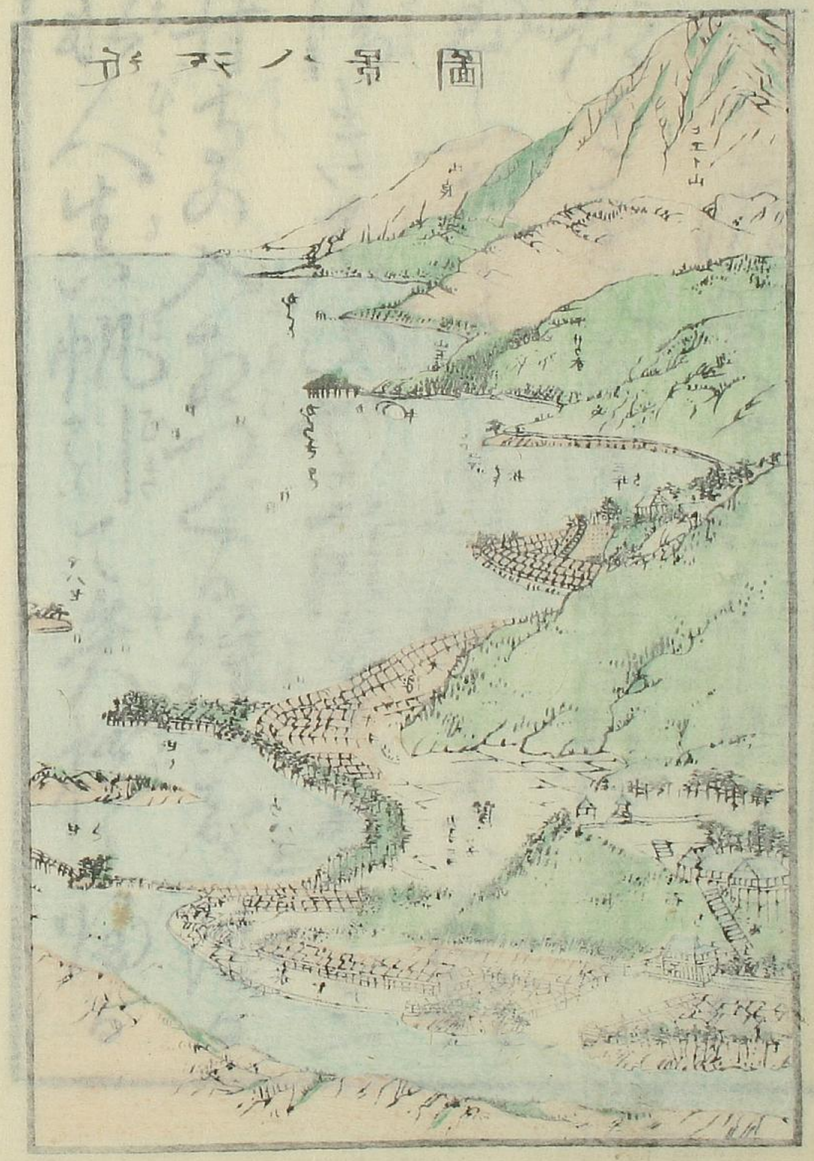
天皇十二年一夜に湧出
嶋ぞ中ノ嶋
東と西に地を分ち四方の
ると云ふ西は江東は東海
道名勝の數東西南北
に數へ擧る所

西より京へ登合て都
の富士の比叡に比叡山滋賀に
花山滋賀の浦に琵琶
天智天皇まします都の跡を想
ふて京へ入いづる人
淀来の道に絵畫をもてみ

なを君が世ふる坂の昔に哭
の山ふもとに大津の宿の
ふぎまし船へ帆を多に
出帆へ帆南の猪石の市中
よりも滋賀へ船を立置て
南は十二郷の西西江



路の海賀一郡。東西江の五
郡とを合せて笈轉ふし
玉ふ。近江の、京八目を
隔き石山や瀬ぞさいめし三
井寺の八ゝつゞる鐘の聲海る
船人生帆引て矢橋よ帰る



百千舟。波の栗津の雲晴
て。乱れ蒼き杜よりとぶ夕
ゆふひ
日さす濁の色を見
て渡る瀬多の長橋
あづまの名ぞ。はるの花
白雪ぞ。ひさだ孔雀き濁

て。おのづから堅固なかまえなり。
あるうちまでうて小夜更て
淋しさまさる度嶋の松
こゝ数雨の音をきく
東をゝ山おほく川なを
き捨ゝ中て。山のうちまで

伊勢の海うて。高山合て磐
嶽南ゝ中間釋迦この嶽。
川ゝ野海漫
善利の川の流へ入
根とく。湖ゝ
岸の地。大上郡の屋敷ありて。

西は高島一郡と東は江
の愛智川迄。北の五郡を管
轄して二縣合て一國なり。
人口五十三万余。寒候風土
も自ら異なり。
南は北を抑へ北は南を抑へ
し。寒根以南は海辺
南は中のごき所地質極
めて潤澤なり。五穀一切
実る。水産物
の豊なること日本なり。

第四番目のものとなく其
民俗い他国より稼きたるを
ゆめまでに善を蓄へ淑を
包む身持なる人なり
其豊なる産物の中ふ
徳まとく貴きもの米穀也

硯布紙石石炭長濱糸織
樂陶器及び茶豊の表物
海藻布打木塗物帷帳鍋
釜源内帯脇地雨の魚田三
氷魚ヶ瀬田幌
東山道第二番目濃も

海をのきて平地つゞく小と東へ
山海をへ恵奈山鷹巣松
檜山越前飛彈と信濃
地平界を接して西へ
まゝ近江と濃と山のりて
伊勢地平近き多度山ふ

ちゝ高平原養老の
瀧を響き音我をとる南へ
ひゝ平野井き尾張を
参河平界して廣原
水田いと海木曽より
来る本宮川飛彈弘

とて川合流て洲股川や
大垣川千流を分て國内
を。蜘の網はりかはたをけく。
充ち足たる拍の末。
尾張の界を極めぎりて。
伊勢の海へと注き入る海

股川のよ一流て厚見郡の郡
府を岐阜と名付て菊丸
の一國一國を愛接を。拍子
人口を数て。五十六萬
六千余。山林田畠豊のり
て。五穀糸綿て生じ

山手を京にそなへて。
南を自然中正なり國風
美にして人事よく多く
きこゆる地にして出物
美濃紙生糸麻布苧
糸綿絹物織物等実の

丹物や薬品陶器器具
もろもの產物なり。
常三元陣山國にて海
都にはの物
前加賀越中南を美濃ふ
東にを信濃を受けく

四方山岳嶺流筋入鎗が嶺
錫杖双六白木岳山囲む其
中しめり見まで矢張
山所謂龍の脊中ゆて高
も高き土地北方より南へ流
濃地へ流き出る。久井流と

北の方越中富山の海へ入る。
神通中田の二川乳水の源
國中平。蔓り たる中央
平。名を高山と云る地。
國平仰合ぬ郡の義の市
國北八口八方余。もと谷間

の土地なまこび。寒暑もつとも
不正すくなく人氣も都て愚
直なる。其外管轄も隣国の
信濃の筑摩縣廳にて五穀
熟らず産物も林多く
其外銀銅綿煙草

彈碁の及ひ石油。
米四信濃に飛彈よりも。
なほ又高き一大國龍乃
脊骨の正中。日本一の山
國なり。四方を包む十ケ國。
北に越後に其西に城

中尾濃州美濃の國高
き冬河を渡り江州に出るまで
うり地を接し東の方を
甲斐武蔵之を加へて上
野越其境に聚えみなる山
ゆく孰れも嶮しく

ゆくゝたひ境を入るとき
ゆく壺中の天地ありて
く國内往来の大道とし本
曾路を始め桟橋を掛
渡したる中に京と結ぶ
ひやるさへの如くなり其

山々は大概。横嶽三所。
野熊山。奥石御嶽。駒
ケ嶽。素倉大嶽常念嶽。
穂高鳥帽子。屏風嶽
笠里鼻茶臼嶽
や姨捨山飯盛山。和田峠。

釜澤鉱ケ山嶽大倉高倉
白峰山。梅花藻を浅間
嶽。夏も雪。戸隠の
山。千郷。滝の吉。
山々より蔵ち降る。水を
次第に集て。西へ

向ふて木曽の川南ふる
て荒川ゆき流れ姫川
や。越後又北ふる犀川流
れ麻績の二水おあつて信濃川
の一水となる越後に
新潟の海に向て流れ入る。

木曽と信濃の二川を頼り
出る大河ふく坂東太郎
とお並ひ之を称して本
邦の三大河とも申ふり
南に養て天竜の越後源
を諏訪の湖周迴三里の湖

まて永もらぬる冬の日を
人の往来の便より月に
名所を更科山うの姥捨
山田毎の月駒を桐原望
月や温泉の名ふも数知ぬ
一國都て五人只七十四

万八千余北はりくしてなきうる
ほと陰氣の深き所なるく
人の筆頭も健なり日本一
野ゝ乾風を吹まさくる国ふ
の官轄を西と東に二分
して東の方は六郡を摩

と筑摩乃二川の出合ふ所と
又は長野縣西は四郡と見
陣一圍を屏乃水と打ち
筑摩縣てふ廳あり金を
くこと支配せり。北は産
物を諸材木蕎麦麻綿也

小松原白芋畑草刈糸紬
五ヶ上野是も信濃
隣る山國なり海なし
の地狩猟十番鴨是の
業はしなく南は武蔵北乃
方越後岩代の地を隣る。

東北方より下總と下野北
地より界しるく山峰しく
出地高く坂東太郎乃利
根川の水源國中元滿を
山より二を數へたるまで小ふ
榛名南より妙義白狐や

藥師嶽より赤城西乃
方雄知峠より木曾海乃信
濃の國に界しるく三國峠
と名付たる山より北の數
三つあり北山脈より一
ツあるまで中より城後し當ル

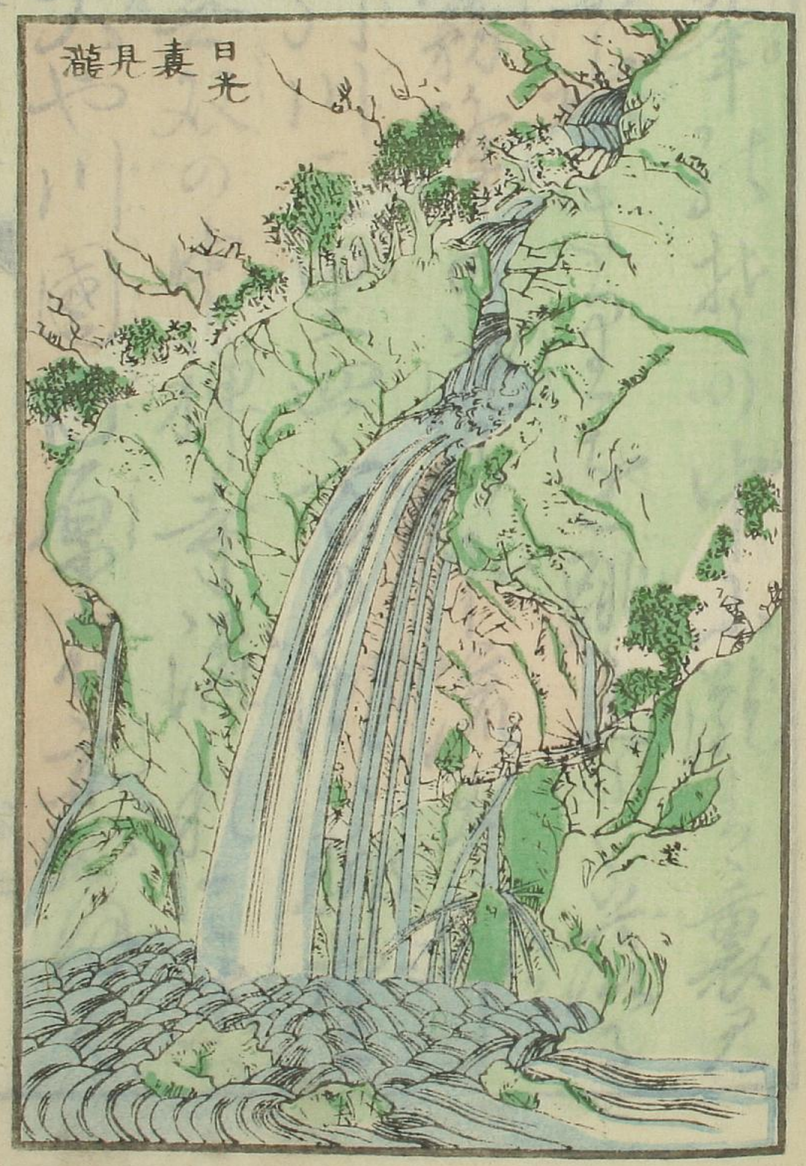
と北岩代と云國界東方
あるい當國ゝと岩代下野三
國に分て立てる山すて
西なる方は信濃地と越後
の國と當國の界を分つ所
なり扨も當国の人口凡四

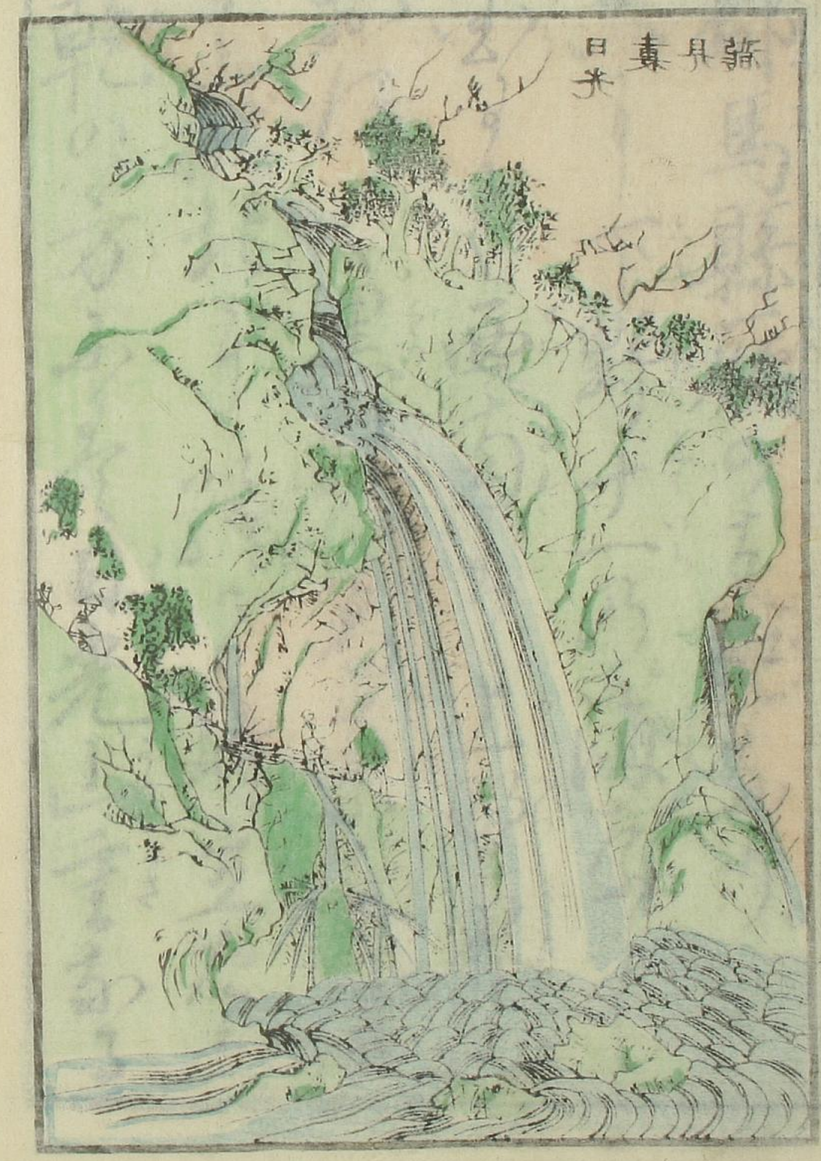
十九万七千人山多く宝気
強く生じ一体暖気の土
地にして稼の未拙く
生産乏し。呑飼乃業の世ふ
得ず。蠶稙生糸や織布
頗盛り仕出せ世に賛。

上野物とて称えらる。其
外は産物も。佐野の白芋
上布漆其風俗も信州と
異なることなく多くは
鴨足の葉の根もあるたる
玉地より二つけて右の三

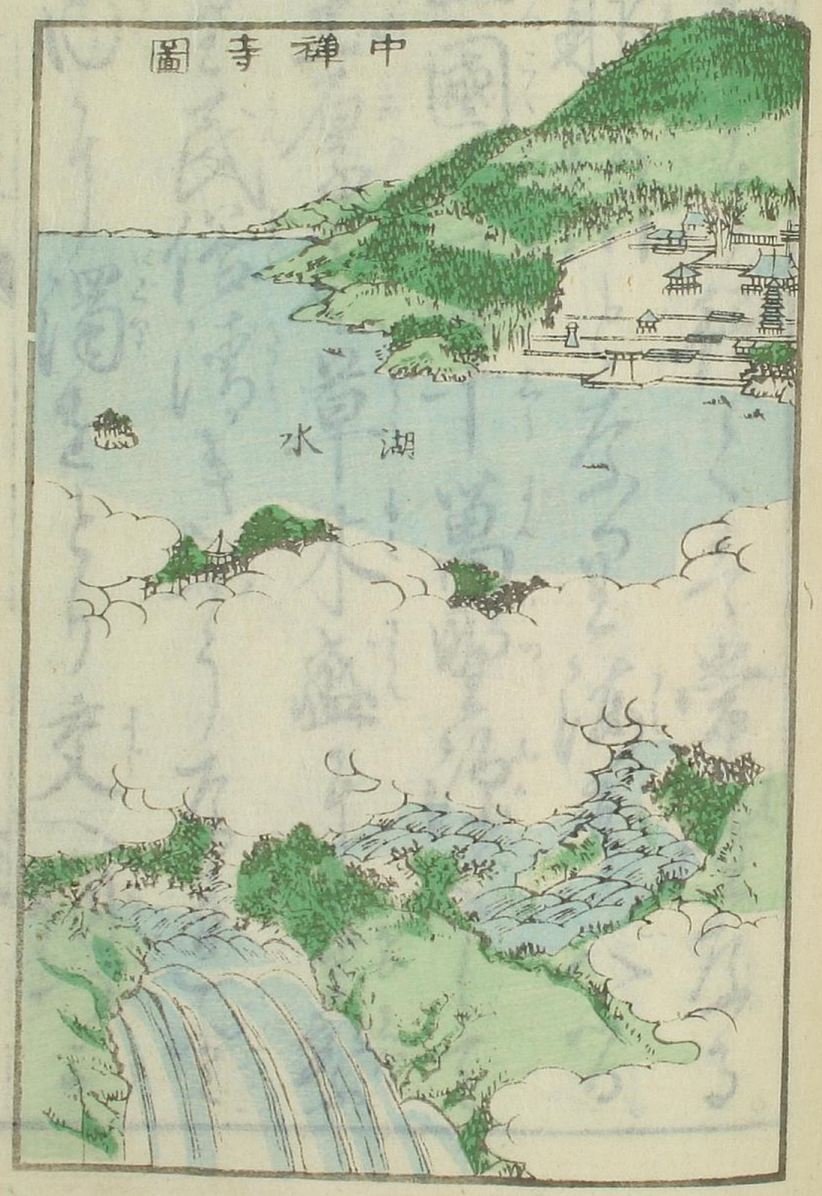
郡邑樂て新田山田をもて
管轄せらる下野の賀
の郡乃栃木郡。其外乃
郡十一も國社中央より南
葉乃方多くて高崎のとく
郡の兼の町て立ら様し

郡馬縣廳の支配なり。
六ヶ下野十一乃海辺
より西南上野界山
和名抄黒髮高原奈須
ゲ山嶽北ヶ峰峙立たり
乾の方より日光山重なる





峯より北の中小滝より裏足
水きりまたを跳立て落る
霧降の滝乃下流より布
引川三里四方の内の滝八脇滝
合双の中禅寺流れ来
大谷川國内原を京都へ



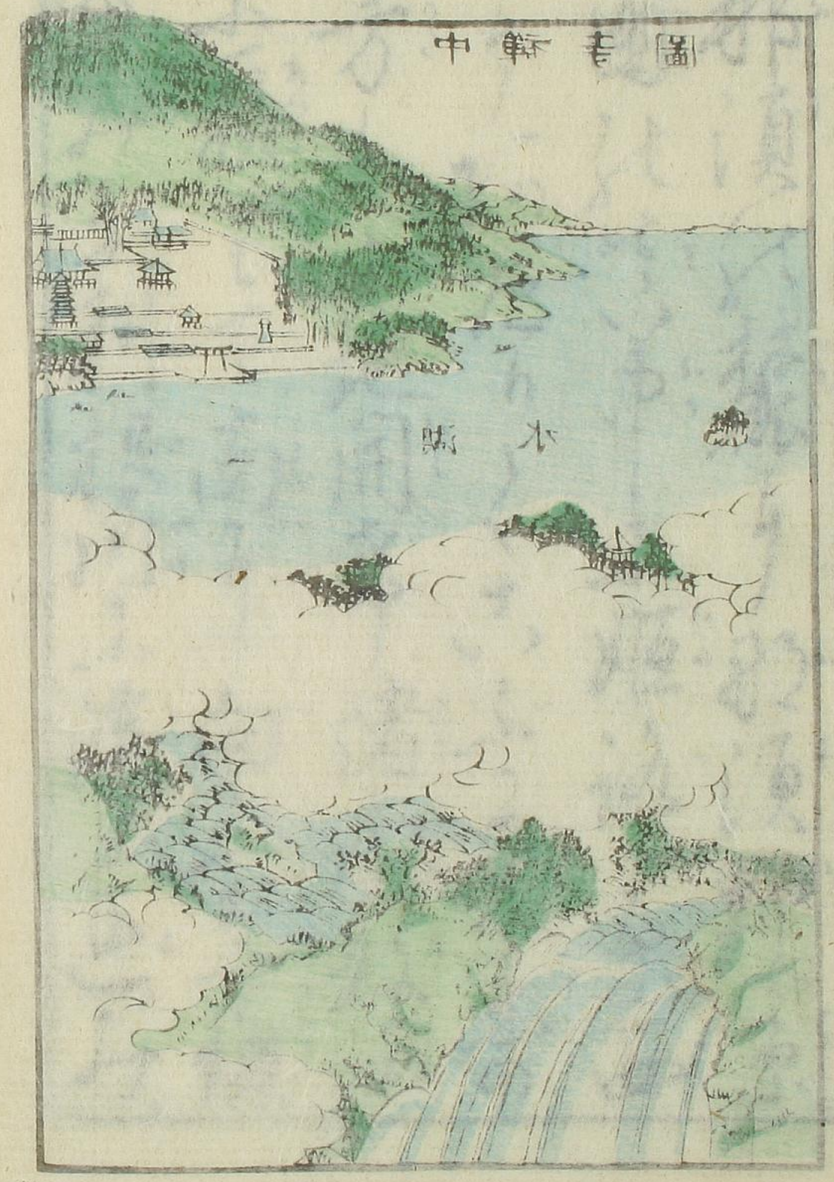
那須郡 那須野原。
國 北は下野 小姫路原西
より南へたりくさいぶう原東の
方ゝ土地開拓 諸水数派
小船にて南へ向ふゝ下總
のみゝ利根川ゝ流れ出る。

東に行くまゝ常陸なる那珂川と流れ海に入る

一國人口四十萬野原深くして土厚く草木盛に生繁

里民俗清き方にして

濁をとり交へ飲つゝ



ひたち鄙びたり。其管轄を
東へより分れて東を宇都
宮縣東京ふの部の華北
地西を上野三郡を加へ
て杉木の支配を細漆
絹麻紙日光を本地と

苔是也。ほの玉屋物ぞ。
其東七を磐城の國西邊
の方より阿武隈川越て北上
を岩代より。義ふく流きて
當國北を界をかち中間
を又岩代を通り過き北よ

ますた舞びこの
地の四方へ山ゝ谷を流れ
ひき渡瀬川と落あふく
東へ向く海へ入る是を
陸前と云ふ渡瀬川
の一ツ也高く峙つ藏王

恩君の恵を不忘の山ゝ
ゝ傳ふる温泉と云
出る竈崎也國の南乃一國
ゝ下野と界して
山ゝ拍ほく立並び白坂
こえて白川の関を昔乃

関の跡本邦実の高初とする。
東方都より海岸まで磯
うつ浪の音ばかりとどろき
門の数知ぬ中に一さてだ
南を〳〵離れ行くる常
陸なる久慈の河れる水上

陸奥國十三郡の内南の端に
白河の郡北内乃西のまへ宮
里に変る岩代の福島縣
の支配北北端なる二郡
と宇多の内なる中村
小の変る陸前の宮城縣

廳管轄し。中ゝ狹く
十郡ゝ乃ち當國本縣の。
船石前縣の支配ゝ有りさく
國產ゝ品ゝ白河編編
船城雲州白石紙ゝ三
ゝ弱ゝ牛馬いと拙ゝ

ゝ是より後ゝ船
城岩代陸前ゝ文陸中ゝ
陸奥ゝ五穀豊饒地味厚
き。陸奥ゝ名付ゝ廣大の
一ケ國ゝ下の里ゝを去る
戊辰年ゝ。ゝあゝ

五ケ國なり。其の一ツに今日
本国。新羅より捕来りし人の
数。より〳〵今又以前乃一國
たるもし其の時に貢を掲
げ〳〵大畧を知らしめんと
其ものなんぞ

一百六十万二千五百の人なり。其の風俗の如
く。偏屈頑固なるもの
也。其多少の書を夫〳〵
づ尚ぶもの也。右のごとく常陸

海濱ゆゑ外の
地より遠く人氣も常
陸ふやゝ似たり其余の事
不審つよく小ふべほど
雪深く土地も良事遠
ど鄙風ふく言詞も卑劣

事多鼻ふこのゝまく
字きぐるまく
八千岩代山國ふく海を
國に接の十二西ゝ越後
千地を隔里ゆ通ふ
え山の上ゝ六十里越又さふ

八十里越をつゝみて數ヶ
所立ちくび。拾の嶮し
き杖想ちる南ち毛の道
よりとゝ下ることれとてこすた
山續き拾ち色内へ
入ちこみて國の内地を南

おりこのけ山ハ。
大越布引安達山。信夫市
ち和尚山。吾山。豚の東西ち
野ち平地おくして東
五郡ち盤城ちる白川
ちしを加へ福西郡

の支配なり。地形東西に
開き中を貫く阿武隈川。
信夫の原や安達太郎野中
の清水に結ぼれて温湯を
須川二本松壽きいとふ
福島のぞきさふ所を紀

屋を立置たる所なり
西を若松縣。
猪苗代の湖や只見の川
鶴沼川川の水合て一つ
となるまく越後地へ流れ
てゆくを會津川小の系

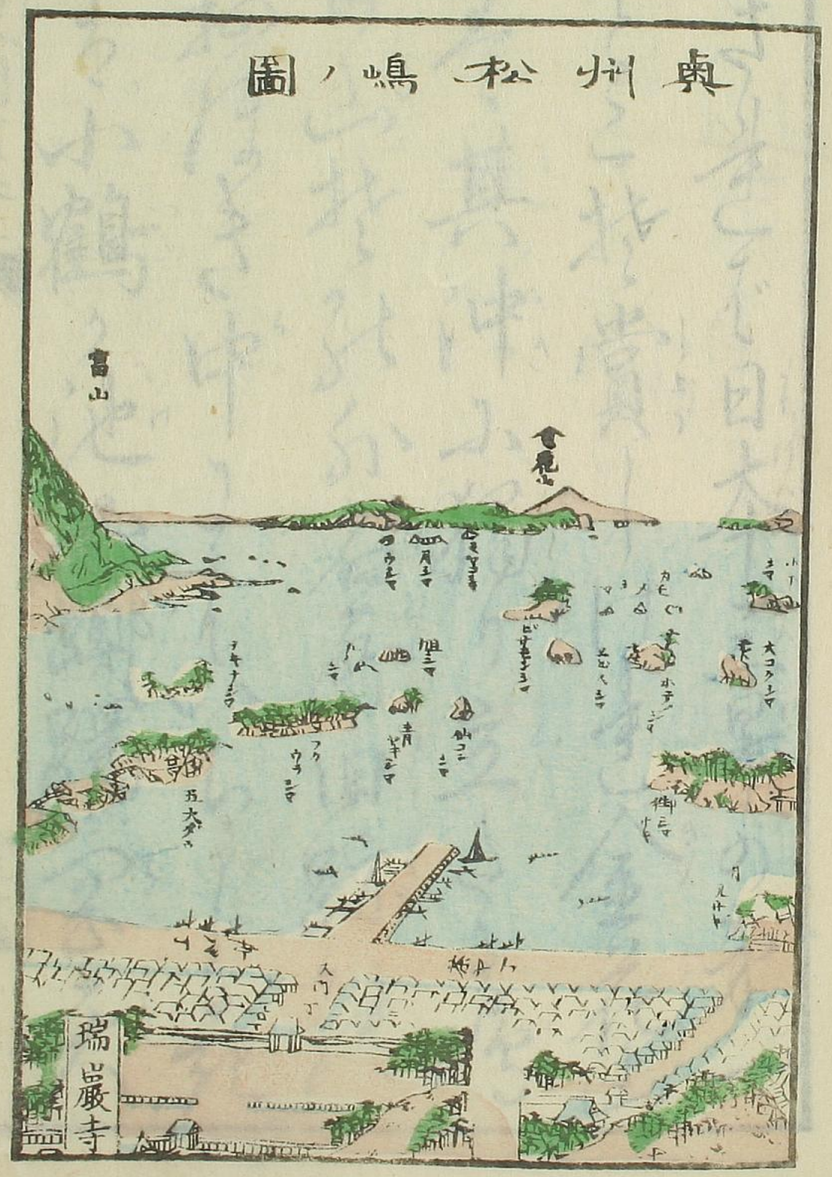
て萬代山峯にそそぐ元
榛ふるる塩の泉の温多湧
き湯の効ありるのみなる波
く日々食用の塩を製
して長崎に天津
御神社神わざ又名松

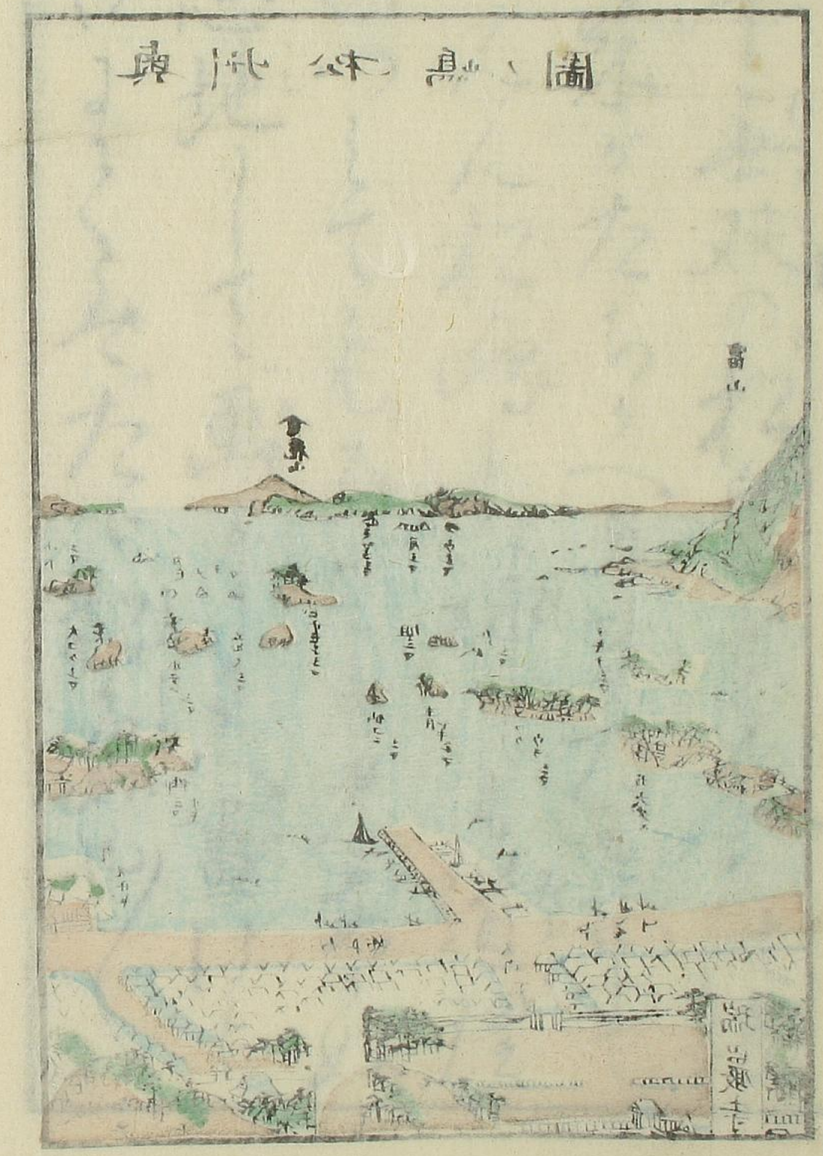
ふる温泉あり土地を一
体宝くして雪深きこと
甚しく甚奥産物を福
島絹信夫摺絹人参や
漆蝋燭棕櫚と盃
さくく九番目を陸前をて

全國都て山おほく。西を
羽前小界して。山脈陸續
して。つきさす所のら就の腰
骨ふとく中ほど高き處川
岳南の方を阿武隈川。
經城岩代國界東を一面

太平海牡鹿郡はその二郡
海をつきさし大岬十里ホ
曲り湾湾と成りし地方の
濱を小湊小嶼數百
千。所々に古松枝を垂
き。曲洲環浦奇く怪し。天

下ゑ双の松島とゝ。この七俊
業がたちゝ。すの先も来て
又ん松嶋と。詠しも道理
いつゝてゝん。みてもゆ又あらぬ
心地して。画うさへ画けど
口まゝゝそ。たゞ松島やゝ。





さらにまでで日本三景の第一
とこと称賞しけまし金花山
そ其沖小獨り立つる島
の山巒幽邃石磯回蹟
相屋まき中うそいたしる
ま小鶴ら池地躑躅ら天

平寛字六年ふ。建てたる
壷碑あり。多賀乃古城
の跡なり。川つゝき石田廣
瀬川ふ上川より巻入るゝ。
海へ流るゝ江合川廣瀬
の川ふ南ふ奥の都ふ

青葉山仙臺ふ入ふ
巻の市宮城の郡の府
つゝく江合川より南の方九
郡ふ隣の磐城なる北乃
四郡を管轄し川より北
の五郡ふ接ふ北の陸奥陸

中ゝ。水澤郡の支配なり。
仙臺紬紙布 平飯奉書
其外紙のるゐ 金海鼠壁
木材諸材是も此地の産
物也。
十ゝ 陸中 ふい也ゝ高

山和田まき國ふかくて西ゝ
弱酸月の山。仙人峠。栗駒
峯。早池神山。姫神山。小
の方より南へ。中を
北へ。川。陸前。さぎて
海へ。北上川。水源を

南の端の北上山。
國の西を陸前より
續きて一ツ山の脈筆
の如く引つゞきたる。風
激して大濤の躍り揚る
ごとくなり。其數あげて

彈されて烟浪の間しら波
界なり中ゝ高きい栗
駒山。きるとゆ猪無川弱岳を
東にして宮城郡山。奥乃國士
とゝ名をつゞく北は陸奥
ゝ界して兩端突出中凹み。

角の形手さゝ似り。左の
角は一本ゝ。唐の角郡と名
をつけて山と數し立並び。
金銀銅鉄槙月山芦柄花
部八畠山羽後より流る能
代の川は水上ここにひの其

管轄する物のづつ羽後の秋
田は郡郷村。村は余目
小手二ヶ村。小い郡ゝ
盛岡の岩手縣乃支配して。
南は方の三郡と陸の前の
國の郡をゝ。管轄するゝ

当郡の磐井郡に水澤縣さて東にまた一面に海ふの杜にみて川和泉川北上川乃江の川に養老川を夜川伊ぶき和加川豊澤川典渡川に水上より小ふ

數ケ所の温泉あり其内大子名を湯ヶ沢より出し出羽に入る石馬をいぶきて土地に尾駁の牧や奥の牧荒野の牧なども牧より出づる

於て駒の數年々數
萬匹諸國より出だし賣
買す。其の國の産物多。
南部紬や縮布。奥州
名物の鰹節。子籠の塩引
で。水精銅。板材又馬の

尾。もしくは牧馬
米ナ。陸奥。東山道
の端。此國。三方海。對岸
を迫門を隔て。松前道望
むさきの先。二股より
て出る大岬中を海灣

いくばくか多數の中なかうち
第び。東は岬まで北部かけて
延び出でて西へ折れて西の岬ハ
三馬屋より分が濱迄つ連
き。其海灣の八也。伐の
底より青森縣。南は出羽國北

きより又小海灣の松前と。
保きく之を笈輦とて。南は
羽後と陸前とかけて。界を流り
山ふかく國の内部ハ連りて
雲ゆ濱ゆる岩城山津
輕富士とも是ぞうく

東の岬より煙つゝ火煙ふき出て燒山なるもの
火山の一つなり。川なる越地津
糠川温湯なる青森より東。
濱辺の方より安佐出あり。
南は山ふ碇関なるもの

名湯なり。さて此國は蝦
夷ゝ津糠丹出や津糠石燈
珀舍利石津糠弱。
東山道の第十二第十三
羽前羽後ぜ二ケ國に見
よてゝ。出羽と唱へて一國の

地をあらしを度年ふ。
二つを拆て南を北四郡に
羽前山の方八郡を我
羽後といふ。二郡都合
八十七万百人余其
風俗を三陸に似寄れど

智あり健けたり。土厚
く沃穀実のり富て家
多く雪深し。羽前の
國を岩代の山あたりて
東の方山脈をへて陸前
と脊中を合せ北を羽後

西より後に海をうけ西
南より城ほり四地をこ
ぶる山おほく繁きをく高
く聳へる月山羽黒湯
殿山川〻を合げく夢りし
中に名あるは小田黒川寒

川江川やをぼろけ川昇る
ゆきさへや降るとも美なきま
ま雪百最上川古川しの落
さく一つに有りしい坂田川
川を相後より異まを北
の川口に酒田縣知屋あり

蜀江の海を経て田河一郡と
羽後乃能海を支配するなり。
其川上の最上郡村山郡と
置賜郡を分て合一す。
管轄する山形郡南の
隅の置賜の郡の多い米

澤を立置賜を置賜
の郡を支配を仰ぐなり。
羽後を東の山國を
く東を陸中山つゞき岩
手森吉郡を南を保呂
波高屋山殊に高きい

鳥海山。中ほどに大平山の
方地を陸奥と相隣る。
矢立森山池の其國にて
形ち長方にして東西より
南北へ。頗る長き其一面。
風浪高き北の海。海に

さし出る男鹿嶋根もと
塩やの地峡ふく繋きと
めたる半島に向ふ地方の
船川の口より後に一桟乃
海水いりくぬ中に潮を
たゝへ西百八町即潟岸にい

生板高瀬島より合
風和山より中ゝ狹き形
山や山又山の數ゝ迄ぞ川
能代小吉川國より生市ゟ
戸島川戸島の川乃川口より
久保田ゟ一市ゟ秋田

縣藤の名所。拂子紅花
の産稗ゟ飯海を隔き當
郡より七郡ゟ陸奥ゟ
鹿角郡を加へ多産さく
ら面より產物ゟ錫銀鉛
蠟漆。秋田蕨紫蕨紫蕨油の

紙や麻の皮青苧真苧紵
の花米澤紬秋田織なり

瓜生氏日本國畫盛卷三終

瓜生三寅著

明治五年壬申十月新雕

名山閣　東京芝大神宮前　和泉屋吉兵衛

010190534192